

【大学・一般の部】優秀賞

幸せなふるさと

福岡県福岡市 衛藤 梓乃

「どこで就職するの？」

「大分に戻るよ」

次に聞かれるのは決まってこれ。

「なんで？」

県外の人からも県内の人からも、口を揃えてそう聞かれる。そもそも就職というものは性質上、どこを選んでもそういうものなのかもしれないが、それにしてもなぜ県民からも、大分県に戻ってきただけで驚かれるのか。

穏やかな気候が好きだから。自然に囲まれて入る温泉が最高だから。ご飯が美味しいから。新鮮なお刺身も美味しいとり天もない場所じゃ、生きていいけないよ。冗談めかしてそう言うけれど、実際にその通りなのである。

水が合うのだ。自転車で坂を下る時に見える空は、やっぱり県外とここじゃ違うし、連なる山々の高さや形だって違う。県外には別府湾みたいに一面に広がる穏やかな海と湯けむりもないし、ふらりと立ち寄れる温泉だってない。

大分の高校から、県外の大学に進んで、大分で就職をする。私の選んだ行動は、いわゆるUターン就職というやつで、生まれ育った地元で就職するだけなのに、随分と仰々しい名前がついているものだな、と思う。周囲にも、大分に戻ってくる人はそれほど多くない。同郷の友人にまで「なんで戻るの？」と聞かれた時には思わず言葉に詰まった。

「十で神童、十五で才子、二十過ぎればただの人」。地元の公立中学で首席をキープし続け、県外の大学に進学した友人は、よく歌うように口ずさむ。それを聞くたび少々やるせない気持ちになる。彼女にとって、この場所に戻ってくるということはやはり息苦しいことなのだろうか。

確かに、地域のつながりの濃さは、良い面だけではないのだろうと察するところもある。『さす九』として揶揄される現象が散見されることも否めない。一方で、もちろん繋がりによる温かさだって、はつきりと存在する。私も高校入試の際には、地域の方に応援の言葉をいただいたことがある。

昔からずっと変わらないことで保たれている良さは確かにあるはずだ。でも、同時に、時代と共に変わっていくことも求められているのだろう。緊密さから生まれる光と影は表裏一体だ。地元に残ることだけが必ずしも正しい選択ではないし、その逆も然り。すべて、人の選択は尊重されるべきで、等しく価値がある。要は適材適所なのだろう。

私は、地元の良いところも、変わっていく必要のあるところも、全部ひっくるめて抱きしめて、一緒に変わっていきたい。なぜなら、偶然にも私にとってとり天はなくてはならないものだし、それはそれでつまりは、地元に「向いている」ということなのだと思うから。

ひたむきに仕事をする中で、それが巡り巡って大分県をより良い場所にすることにつながれば良いなと思う。同時に、1人の県民として、学び続けたいと思う。日常生活で出会う人たちや、子どもたちとのふれあいを通じて、思考を深め、ちょっとでも地域全体の空気の流れが変わっていけば良い。

中庸というのは一見するとどっちつかずで曖昧に思われるが、実際は一番難しいのだと思う。なぜならば、どちらかに偏って思考を止めてしまう方が何倍も簡単だからだ。新しい時代の訪れと、古き良き文化。どちらを潰すこともなく、バランスをとりながら進めていくためには、たくさんの人と関わって視野を広げ続けるとともに、新しい情報に敏感になりながら常に最善を考える、不断の努力が必要となるのだろう。

それはきっと険しく苦しい道のりだ。でも、大分で生まれ育った子どもたちが、のびのびと育ち、それぞの選択をして、生きていけるように。そして願わくば、どんな選択をしても幸せな記憶として大分を思い出してくれるよう。一県民として共に頑張っていきませんか。